

「カンボジア・メコンデルタ氾濫原における在来灌漑の運用のしくみとその変
化—コンポンチャーム州・B村のトムノップ灌漑の事例より—」

小笠原 梨江（日本学術振興会 PD、京都大学地域研究統合情報センター研究員）

【要旨】

本発表では、2003年から2004年、および2007年から2008年にかけてコンポンチャーム州B村でおこなった定着調査に基づき、カンボジアにおける在来の稲作灌漑の運用のしくみについて検討する。トムノップ（土堤）は、カンボジアのメコンデルタ氾濫原における一種の環境適応型農業技術として評価され、その活用に期待が寄せられている。一方で、トムノップの利用の実態については十分に把握されておらず、どのような組織や制度によって運用されているのかはほとんど明らかにされていない。そこで本発表では、B村において100年ほど前からおこなわれているトムノップ灌漑の運用に焦点を当て、そのトムノップの利用・管理に関する慣行と組織の特徴を明らかにすることを第一の目的とする。そして第二に、1990年代以降のトムノップ

灌漑の運用に関する変化について、市場経済化および近代的技術の導入とのかかわりにおいて検討する。

B村には現在、約20のトムノップがあり、乾季の減水期稲作における灌漑用水の確保を目的として利用されている。各トムノップはシステムとして完結性をもつものとみなされ、独立した組織を有する受益者集団によって管理されている。本発表で明らかにするおもな点は、以下のとおりである。まず、トムノップの利用・管理をめぐる集団的営為が施設の維持管理と用水の確保を目的とした受益者の共同を基盤として成り立っていること、さらに、その組織運営については自律性がきわめて高いことが指摘される。そして二点目には、おもに1990年代以降の減水期稲作とその灌漑における近代的技術の導入、および市場経済化の影響により、トムノップの利用・管理をめぐる慣行がどのように変化したのかを検討する。すなわち、第一に、施設の維持管理や用水の確保のための受益者総出の共同作業が減少し、現金での費用負担が主流となっているという変化が示される。第二に、用水利用について、水不足の深刻なトムノップにおけるポンプの利用や新たな水源の導入が、伝統的なトムノップ灌漑の技術と運用のしくみに体现される「平等」の理念とは裏腹の「不平等」を生み出していることを指摘する。これらの変化がトムノップ灌漑の運用に関する理念や共同性において決定的な意味をもつのかどうかは、今後検討すべき課題である。